

Title	特集II「奥井復太郎生誕100年記念シンポジウム」に寄せて
Sub Title	
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998.) ,p.25- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集I I : 奥井復太郎生誕100年記念シンポジウム
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

特集Ⅱ「奥井復太郎生誕100年記念シンポジウム」に寄せて

特集Ⅱ編集担当 藤田 弘夫

1997年7月12日に開かれた三田社会学会の第10回大会は、奥井復太郎の生誕100年を祝いシンポジウムのテーマに奥井復太郎をとり上げた。奥井の都市論や生活論の先見性への評価は益々高まっている。その一方、奥井の名は没後30年を経て、社会学を専攻する大学院生にとっても遠いものとなっていた。しかし前年の1996年には、ちょうど『奥井復太郎著作集』全8巻が大空社より刊行されたこともあり、奥井復太郎への関心が急に高まってきた。しかし若い社会学者のなかには奥井復太郎の名を知らない人もいるので、贅言をいわず奥井の簡単な紹介をしてみよう。

奥井復太郎は1897（明治30）年11月21日、東京市下谷区車坂（現台東区）で生まれる。1965年（昭和40）2月16日没。奥井の研究分野は社会思想、社会政策、都市経済論、都市社会学、国土計画論、国民生活論など広い範囲にわたっている。とくに、1940年に刊行された『現代大都市論』は、日本社会科学史上の記念碑的著作となっている。さらに奥井の研究のなかには、1980年代になって脚光を浴びることになる「都市と文学」の先駆けとなる論文が存在している。

奥井は慶應義塾の大学部理財科卒業後、大学令で名称変更された経済学部の手伝いとして採用される。学生時代はバークーニンやクロボトキンなど無政府主義に興味をもっていたという。その後、ラスキンなどイギリスの社会思想の研究に没頭していた奥井は、当時の学部長だった堀江帰一より社会改良と都市経営論の研究を奨められる。その後さらにヨーロッパ留学を命じられ、ベルリンに滞在した。ドイツで社会政策論、都市史の研究を行う。1920年代の半ばベルリン大学に学んだ奥井は、ロンドンやパリなどヨーロッパ各地に足を伸ばしている。帰国後はアメリカ都市社会学の研究に取り組む一方で、積極的に東京の地域調査を行う。

当時、奥井よりも一足先に都市研究を出発させていたシカゴの都市研究者の関心は、ほぼシカゴのことだけに限られていた。また、この時期のヨーロッパの研究者でシカゴ学派の都市研究に注目したのは、ゾンバルトやホイジンガなど一部の研究者だけである。しかもそれは、シカゴ学派の研究のほんの一部分のことだけに関してだけであった。

これに対して、奥井はヨーロッパの社会科学とアメリカの都市の社会学的研究の両方を視野に収めながら、現代の都市を資本主義の中核を形成する地域社会だとして、盛り場、学生街、郊外住宅地などの実地調査を黙々と続けていく。奥井の研究は、社会思想、社会政策論、都市経済、都市計画論、国土計画論、国民生活論など多岐に及んでいる。これらの知識の上に、かれは独自の都市社会学と生活論を構築したのである。

奥井復太郎が1940年に発表した大著『現代大都市論』は、高い完成度を示す孤高の都市研究である。『現代大都市論』は、イギリス、ドイツ、アメリカの学問を咀嚼しながら、東京での社会調査を踏まえて完成したものである。現代大都市論は当時の世界に、その例を見ない独創的な都市研究となっている。日本の都市研究が50年以上も前に、これほどの水準に達していたことは驚きでもある。今読んでみても、かれの研究はびっくりするほどの現代性をもっている。

シカゴの学者たちの研究が、都市研究としては個別の調査の研究に拡散していったのに対して、奥井の研究は都市の思想、理論、調査の三者を体系的に組み立てるなかで構成されている。しかもかれはこれを学生たちの協力をえながらも、ほぼ独力でなし遂げたのである。この点で、かれの研究は、ほぼ同時代に進められたシカゴ学派の都市研究を凌駕している。

都市は、ひとつの学問では解明されないほど複雑な存在である。日本都市学会は1953年に社会学、経済学、行政学、財政学、政治学、地理学、歴史学、建築学、都市工学、都市計画学などさまざまな学問分野を専攻する研究者たちが集まって発足した。その初代会長となったのが、奥井復太郎である。晩年の奥井は学の内外の行政に深くかかわる。今、われわれが学んでいる大学院社会学研究科の設置もかれの尽力による。奥井は1957年に慶應義塾が創立100年を迎えた時の塾長であった。さらにかれは国民生活センター、地域開発研究所、観光産業研究所など数多くの機関の設立に力を尽くした。

奥井復太郎の研究といえば、これまで小古間隆蔵先生をはじめ奥井ゼミの卒業生や矢崎武夫先生や山岸健先生など奥井先生に直接薫陶を受けた人が中心となってきた。しかし今回のシンポジウムでは、社会学の第一線で活躍する比較的若い三人の先生方に報告者をお願いした。コメンテーターのひとりを引き受けていただいた山岸先生を除いて、生前の奥井先生を知らず書物を通じて学んだ研究者である。三田社会学会では、今回のシンポジウムがきっかけとなって奥井復太郎への関心が高まることを期待している。現在、三田社会学会の会員のあいだで『著作集』の刊行に続く事業として、奥井復太郎に関する本格的な研究書の刊行の準備が進んでいる。次年度の大会には、間に合わせたいと思っている。

なお、当日の発表は次のような順序で行われた。

企画の説明	藤田 弘夫（慶應義塾大学）
祝辞	日本都市学会常任理事 浦野 正樹（早稲田大学）
報告 1	吉原 直樹（東北大学）「奥井復太郎の都市経営思想」
報告 2	田中 重好（弘前大学）「実証主義者としての奥井復太郎」
報告 3	寺出 浩司（実践女子短期大学）「奥井復太郎の生活論」

コメントー1 山岸 健（慶應義塾大学）

コメントー2 熊田 俊郎（駿河台大学）

討論

奥井復太郎の約300本の論文と著作については、川合隆男・山岸健・藤田弘夫編で、1996年に『奥井復太郎著作集』第1巻～第8巻にまとめられ、別巻とともに大空社より刊行されている。

- 『奥井復太郎著作集』第1巻 社会思想論
- 『奥井復太郎著作集』第2巻 社会政策論
- 『奥井復太郎著作集』第3巻 都市史・都市社会学
- 『奥井復太郎著作集』第4巻 都市社会調査
- 『奥井復太郎著作集』第5巻 現代大都市論
- 『奥井復太郎著作集』第6巻 商店街研究・国土計画・戦時都市論
- 『奥井復太郎著作集』第7巻 戦後都市論・都市と文学
- 『奥井復太郎著作集』第8巻 国民生活論・教育論
- 『奥井復太郎著作集』別巻 奥井復太郎研究

（ふじた ひろお 慶應義塾大学医学部）